

各務原の古墳

古代繁栄の証をたどる



写真1 空から見た坊の塚古墳（鷓沼羽場町）

※平成4年度撮影

1. 古墳時代のはじまり

弥生時代の後期には、土を盛り上げた墳丘をもつ墓が各地で営まれていました。3世紀後半になると、定型化した前方後円墳が近畿地方に出現し、古墳時代の幕開けとなります。

古墳とは、墳丘の形や石室の構造、副葬品などに規格をもち、定められた墓制に基づいて造営された墳墓です。その背景には広域の政治連合が存在し、発祥地は大型の初期前方後円墳が集中する奈良県のやまとぼんち大和盆地と考えられています。

この政治勢力（ヤマト王権）は、大王と複数の有力氏族が中心となって成立させたもので、地方の首長層に一定の支配力を及ぼし政権下に組み込んでいきました。その結果、やがて九州南部から東北地方中部に至る範囲に前方後円墳が波及します。

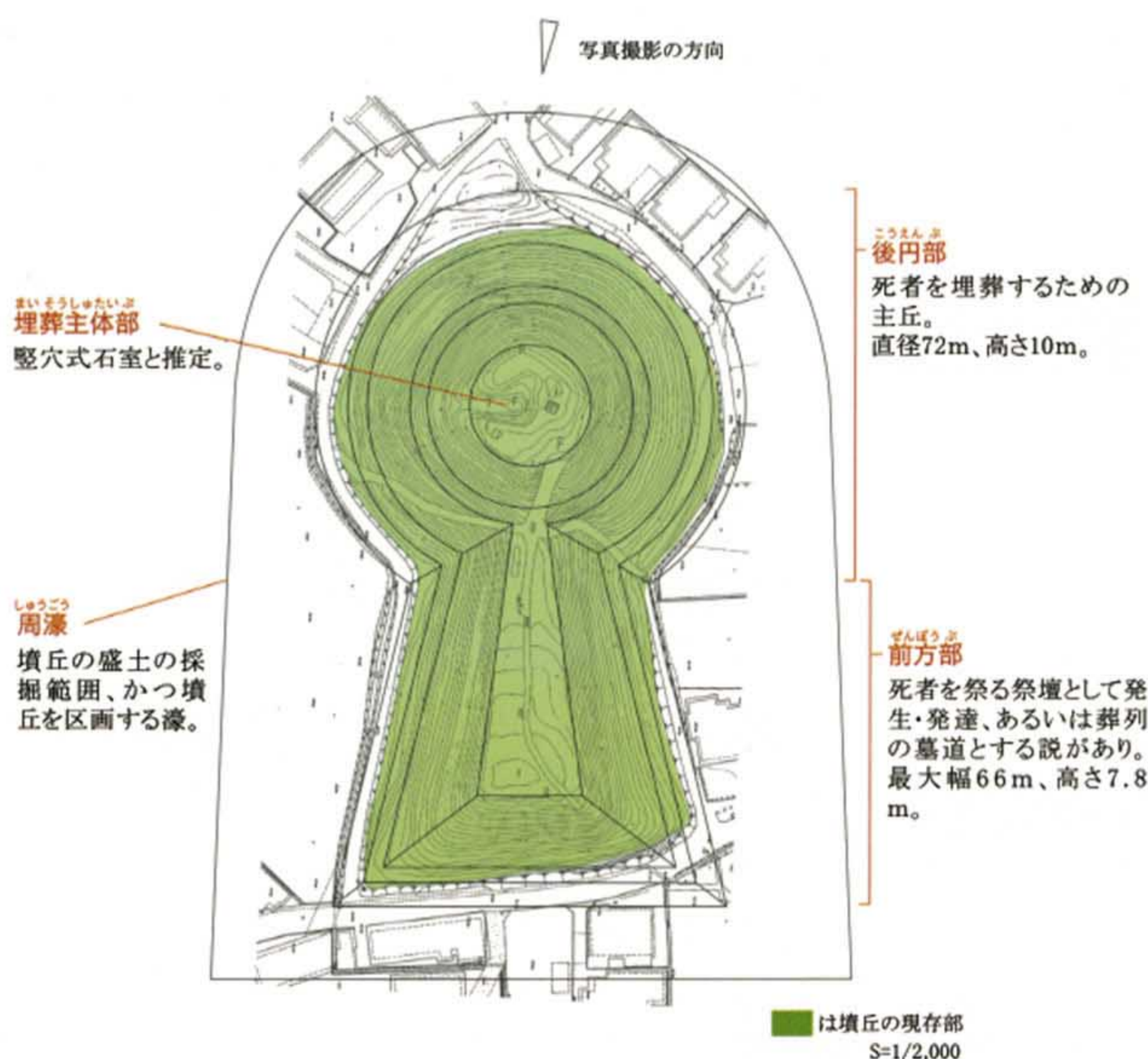


図1 坊の塚古墳の墳丘モデル図

2. 古墳の大きさと変化

各務原における古墳時代前～中期の古墳は、大型の前方後円墳が中心です。坊の塚古墳は、墳丘の長さが120mで、市内最大・岐阜県下2位の規模を誇ります。最も古い古墳は一輪山古墳で、直径約9mの円墳と伝えられています（現存せず）。

これらの古墳は、首長クラスの人物の墓です。その世代交代により、地域毎に前方後円墳が順に築造されていったものと考えられます。この段階の埋葬主体部は竪穴式石室と推定されますが、今のところ市内では本格的な発掘調査例がなく、詳しい資料は得られていません。

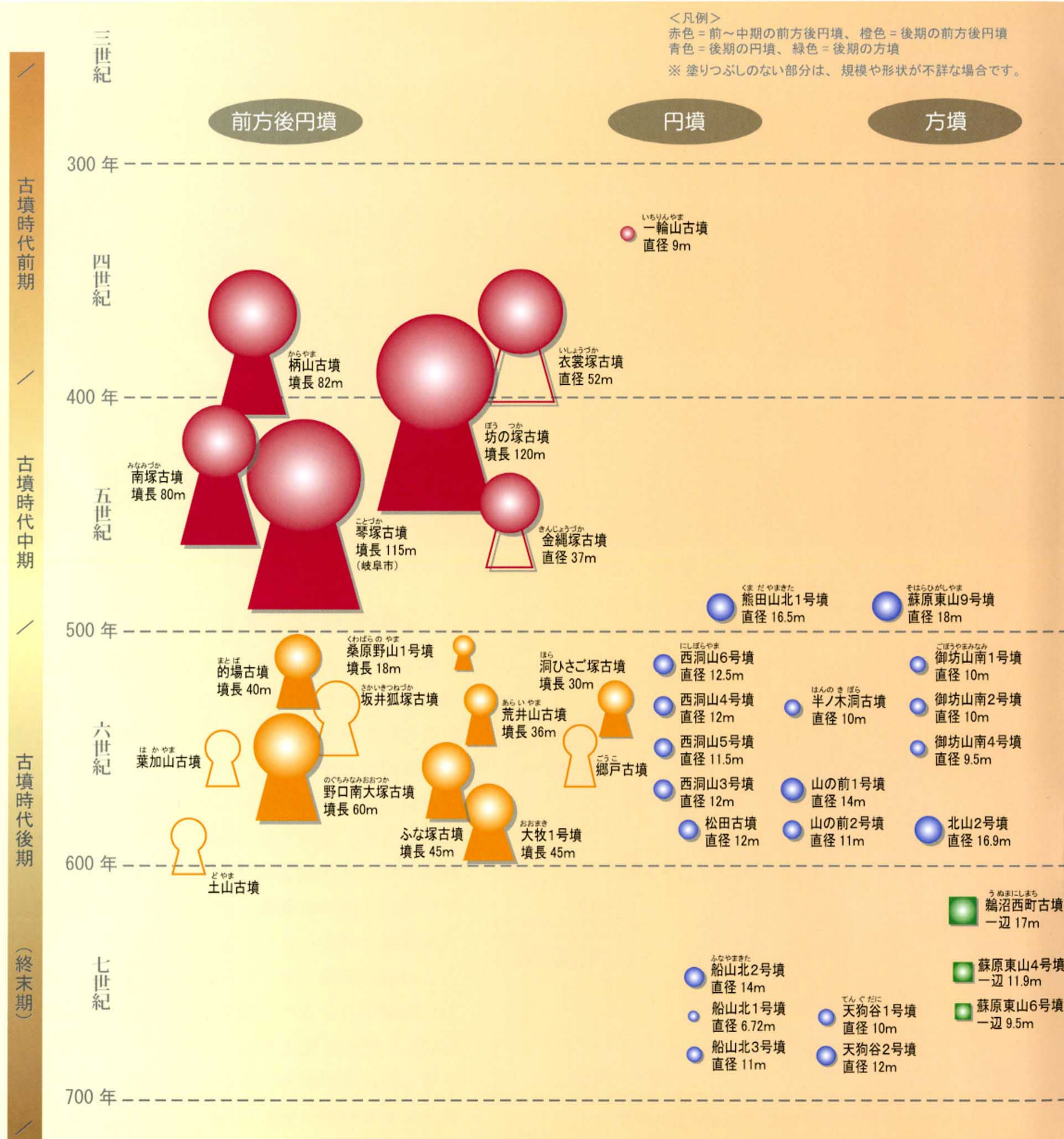


図2 前方後円墳を中心に見た各務原の古墳築造順 ※ 仮説を含みます。

3. 全国的な古墳の動きと重要な出来事

250年頃 箸墓古墳（奈良県）などの定型的な前方後円墳が出現し古墳時代が始まる。
4世紀初めには九州南部から東北地方中部まで前方後円墳が分布していく。

350年頃 家形や鳥形埴輪、武器などの器材形埴輪が出現。
380年頃 大王墓と見られる巨大前方後円墳の中心が奈良盆地から大阪平野へ移る。
390年頃 北部九州に馬具がもたらされ、また同地域に横穴式石室が採用される。

400年頃 須恵器生産が開始。首長墓には多量の武器・武具が副葬される。
430年頃 墳長約486mの最大の前方後円墳、大仙陵古墳（大阪府）が築かれる。
450年頃 大和や吉備で群集墳が造営され始め、6～7世紀には各地に出現。
鉄製農具の副葬が始まる。北九州の古墳に石人・石馬が出現。

480年頃 畿内の古墳に家形石棺が出現。北九州には装飾古墳が出現する。

500年頃 畿内をはじめ西日本一帯で横穴式石室が普及する。
首長層の副葬品は、装飾性の高い金銅製装身具・馬具が卓越する。
530年頃 関東地方に横穴式石室が現れる。北九州の石人・石馬は衰退。

550年頃 国内で鉄生産が始まる。
九州を中心として装飾古墳壁画が盛んになる。
九州南部では地下式横穴墓など墳丘が不明瞭な独自の墳墓が展開する。

600年頃 前方後円墳の造営が終焉を迎え、支配者層の墳墓は大型の方墳や円墳となる。
横穴式石室は東北地方中部まで波及する。
646年 改新（大化）の詔が発せられる。墳墓葬送の制（薄葬令）。
650年頃 畿内支配層の古墳石室が切石積に規格化する。

705年頃 高松塚古墳（奈良県）が造られる。
710年 平城京遷都。奈良時代の始まり。



写真2 大牧1号墳（横穴式石室と家形石棺・6世紀後半）



写真3 北山2号墳（円墳・横穴式石室・6世紀後半）



写真4 鵜沼西町古墳（方墳・横穴式石室・7世紀前半）

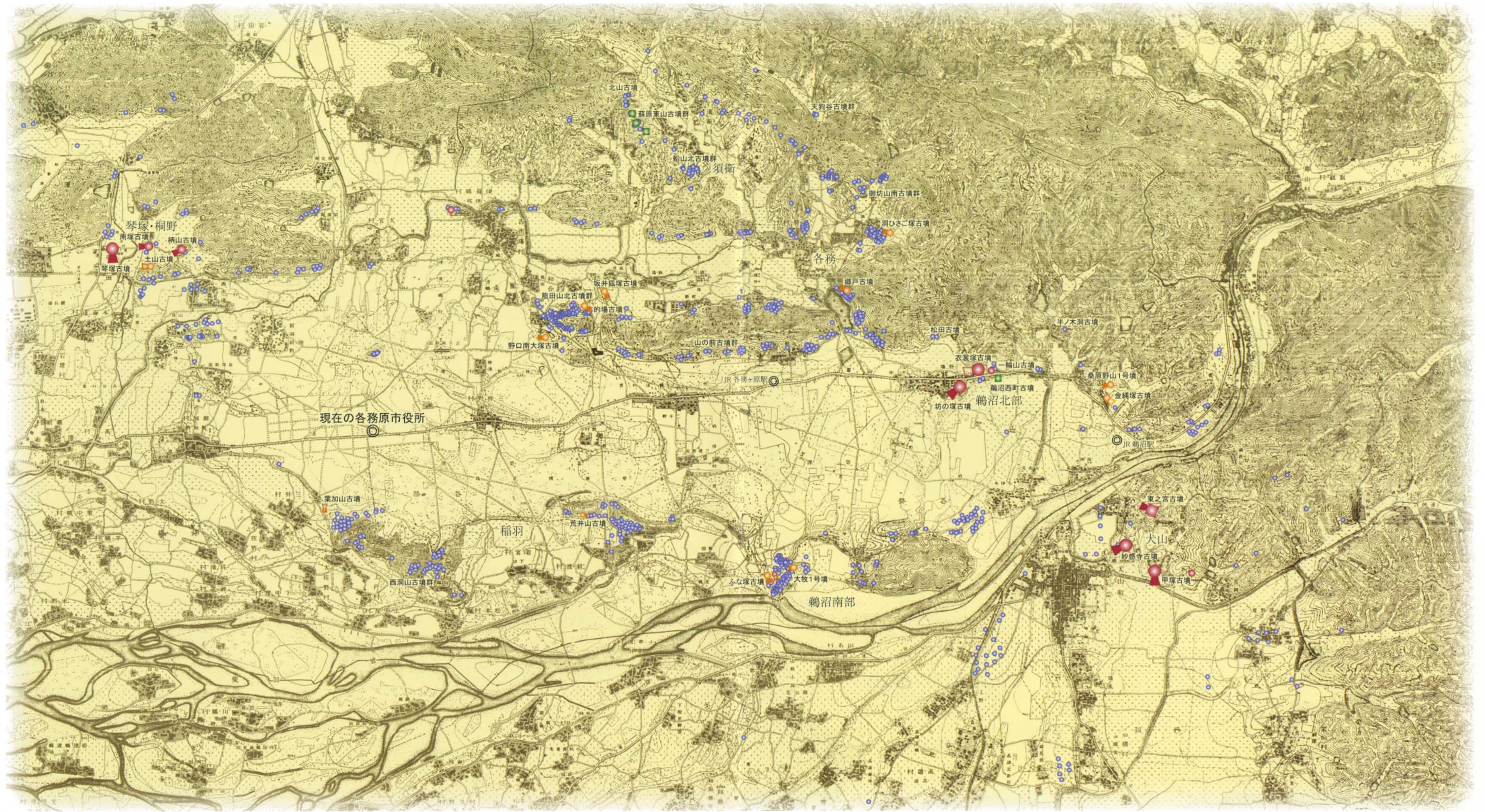


図3 各務原の古墳分布図 1/50,000 (地形は明治時代のもの) ※ 凡例は図2と同じです。古墳の位置と数は正確でない場合があります。

4. 古墳の分布が物語ること

昭和6年に発行された『稲葉郡古墳調書』(小川栄一著)には、驚くことに各務原に600基あまりの古墳が記録されています。現在では約150基の古墳が残るのみですので、当時の記録は地域の古代史を研究する上で非常に貴重なものとなっています。図3は、各務原の古い地形図に、調書に掲載された古墳分布のスケッチを照らし合わせたものです。

古墳時代前～中期の古墳(赤色)を見ると、限られた地域にまとまりがあることがわかります。西端部の岐阜市境である琴塚・桐野、鶴沼北部、そして木曾川南岸の犬山です。当時、この3地域には強大な豪族が存在し力の均衡を保っていたと想像されます。鶴沼北部と犬山については、対岸で近距離であるため同じグループであった可能性もあります。

古墳時代後期には、在地の首長墓である前方後円墳(橙色)は、蘇原、各務、鶴沼南部、稲羽にも造られます。新たな土地が開拓され、複数の集団が広く割拠する体制が成立したものと考えられます。また、群集墳が出現し、数多くの円墳(青色)が密集して造られるようになります。群集墳のなかに、集団の盟主の墓として少数の前方後円墳を含む場合があると見ることもできます。大半の群集墳が山裾に集中するのは、斜面を削り出す工法が用いられているためです。須衛や各務の山間部に古墳が多いのは、この一帯で須恵器の生産が栄えたからです。

7世紀に入ると、鶴沼北部と須衛で方墳(緑色)が出現します。前方後円墳に代わる新たな墓制によるものと考えられます。古墳時代も終わりに近い7世紀後半になると、須衛では古墳が造られ続けますが、蘇原では寺院の造営が始まります。

5. 古墳の副葬品

副葬品とは、死者を埋葬する際に石室や棺内に納められた品物です。死者が生前使用したり所有していたと考えられるもののほか、埋葬用に特別に作られたものや、死後の世界で使用するためと考えられるものがあります。これらのうち、有機質の布、紙、木などは腐食してしまうため、私たちが知ることのできるものは、金属や岩石・ガラスで作られたものや土器などに限られます。

副葬品の種類や量は、時期や地域によって差があります。これらは、墓の築造年代、埋葬者の身分、当時の工芸技術水準、風俗習慣、社会構造、葬送観念などを知る重要な手掛りとなります。また、中国大陸や朝鮮半島から伝播した文化や技術を知ることができます。

副葬品の種類のうち、鏡・玉などは埋葬された人物の司祭者的性格を、武器・武具・馬具などは武人的性格を示すものと思われます。



写真5 出土した古墳副葬品



6. 竪穴式石室と横穴式石室

古墳の埋葬施設には、いくつかの種類があります。その代表が、竪穴式石室と横穴式石室です。

竪穴式石室は、古墳時代前～中期（3～5世紀代）に採用された埋葬施設です。基本構造は、割竹形木棺を安置した周囲に板状の石を積み上げ、大きな蓋石をしてから土を被せるといったものです。木棺を置く場所には、あらかじめ粘土や砂利を敷くことがあります。

各務原における竪穴式石室は、坊の塚古墳をはじめ前期の古墳群に採用されていると考えられます。5世紀末の古墳である熊田山北1号墳では、木棺を置き石材を使用しない木棺直葬という方式が採用されていたことが発掘調査で確認されました。

6世紀以降、大半の埋葬施設に横穴式石室が採用されます。この石室は大きな石を組み、棺を納めるための広く天井の高い玄室と、外部に通じる羨道を備えています。玄室には、木棺や石棺などが安置されます。羨道の前には、墓前祭祀に用いられた遺物が残される場合があります。このほか、横穴式石室の重要な特徴は、入口の封鎖を開閉することにより複数の遺体を追葬することが可能なことです。この石室が普及する頃から群集墳が増加しますが、このことは従前の古墳が支配者層の墓であったことに対し、有力農民など被支配者層の家族墓として古墳造営層が拡大した現象であるとする説があります。

各務原では、大牧1号墳の横穴式石室が最も規模が大きく、家形石棺も安置されていました。この古墳は、76基で構成される大牧古墳群のうちの1基ですが、前方後円墳の形態をとり規模や副葬品の内容が群を抜いていることから、集団のなかでも盟主クラスの人物の墓と考えられます。



写真6 熊田山北1号墳第2主体部

木棺は腐食して残存していません。直刀が埋葬者の脇に沿う位置を示します。頭部と足元には須恵器や土師器が置かれていました。

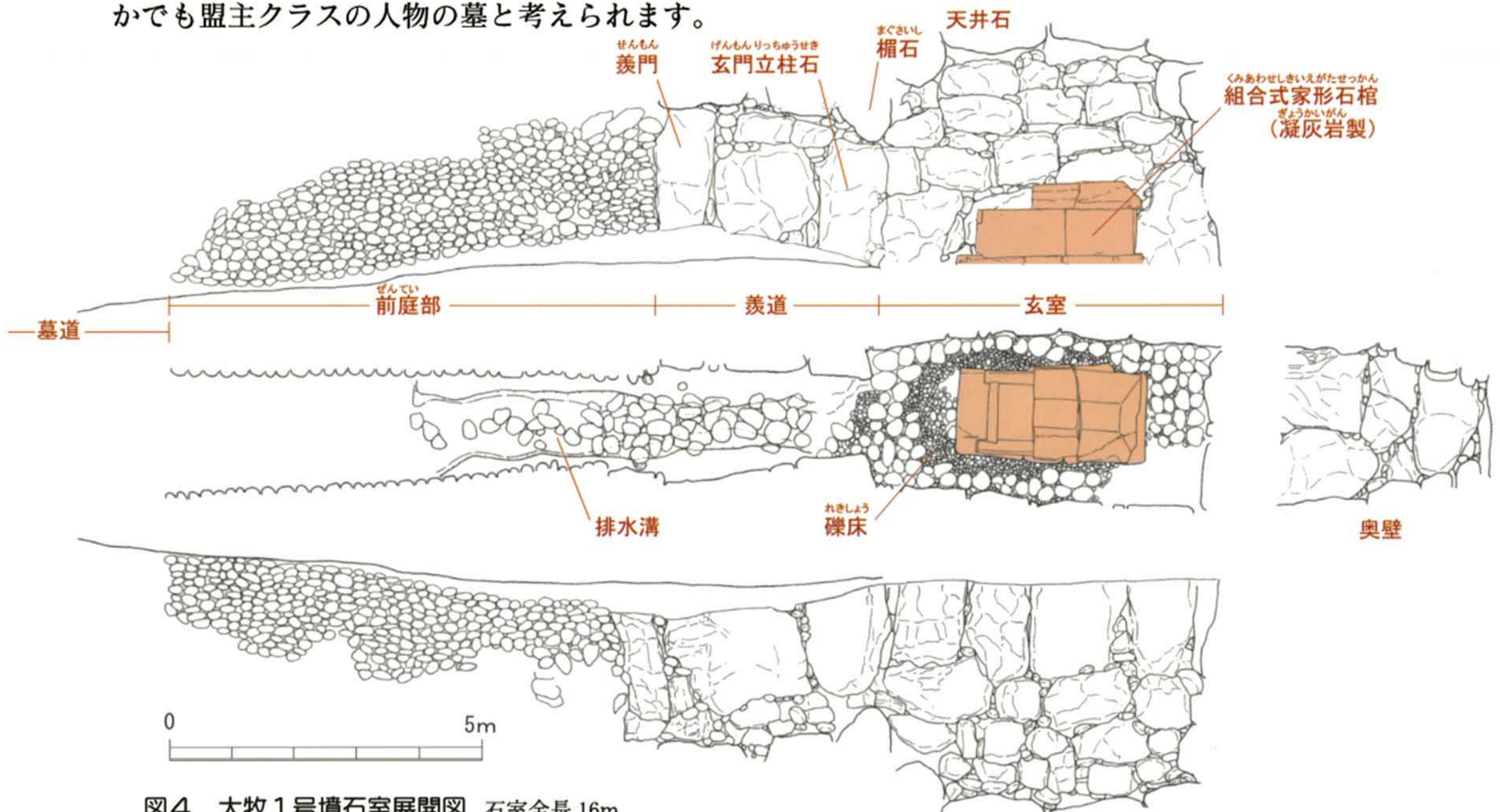


図4 大牧1号墳石室展開図 石室全長 16m

